# 説得術の実際（2）

# Practical persuasion（2）

神谷正彦*
Masahiko Kamiya*

## はじめに

「あの人は物識りだ。」というのはわが国ではずっと長く褒めことばとして使われてきたように思われる。「生き字引」と言われたら誰でも悪い気はしないだろう。何を訊かれてもすぐに説明できる、百科事典のように知識があったら、と考えたのが普通のことで、「頭の良い人」は「豊富な知識を持っている人」にほかならなかった。

しかし、日本の教育の〝知識偏重詰め込み主義〟への反省から〝創造性教育〟が重要視されるようになって、雲行きが少し怪しくなってきた。同じ知識にしてもより体系的な知識や、臨機応変の判断力、的確な自己表現力のほうに比重が移ってきている。

そのうえ、インターネットを利用すれば時間も労力も節約でき、効率よく知識を得ることができるようになった。そうなると、「少し調べればわかることを知っている」からといっても、それだけではもう大したことではなくなってしまった。単なる「物識り」はいずれコンピュータに取って代わられる。

少々乱暴な言い方をすれば、知識自体は既に「過去」に属している。既に誰かが証明して見せた事柄である。知識にのみ依存しているかぎり、けっきょく他人の受け売りにしかならない。

たとえばそれは、一生懸命努力している姿を誰もが知っている人に向かって、社交辞令（公式）のように「頑張って」と言うことに似ている。必死に頑張っている人に頑張れと言うのはたいへん失礼な話だ。声をかける方は思いやりで言うのかもしれないし何よりそう言っておけば気も済むだろう。しかし言われる方は、ほんとうに自分のことをわかって言っているのか？これ以上何をどう「頑張れ」というんだ？とまったく逆効果になってしまう。公式（知識）どおりにはゆかないことも多いものだ。

病院で患者の身体をきれいにすることは清拭と言う。セイシキである。しかし「拭」にシキという読みはない。正しくはショクだ。でも誰もセイショクとは言わず、セイシキと言う。間違って使っているのか、医療現場の誤用であるかどうかはさておいて、いつの間にかセイシキと言うようになったらしい。正しく読めばセイショクなのだが、それだと「生理食塩水」略して「生食（せいしょく）」と紛らわしい。もし、看護師どうしで「○○さんのセイショク済んだ？」と訊いたとしたら、「きれいに拭き清める」方か「生理食塩水を投与する」方か間違える恐れがある。清拭と生食とを取り違えても大したことはないなどと言う向きもあるだろう。しかし一事が万事である。人命を預かる医療現場ではミスは許されない。たとえセイシキが誤読であってもこれはこのままでよいのではないかと思うのだがいかがであろうか。

病院で言うならこういう例はどうだろう。

私の主治医（整形外科）は患者に問診するとき、特に高齢者には必ず方言を使っている。「ニガる？」「ハシる？」とやっている。ニガるは鈍い痛み、ハシるは鋭い痛みのことで痛みの種類が違う。痛みは熱や出血とともに身体の発する大切な「信号」である。痛みを計量化する機械はまだないので、問診は当人にしかわからない痛みを知るためには重要だ。問診の結果で検査や投薬か決まってくる。高齢者を相手にするときは、方言のほうがよいと聞く。なぜなら、お国ことばのほうが正しく意味が伝わるうえに、医師に対する親近感もわくからである。

標準語（という語自体、まったくの誤用だ。せめて「共通語」と言うべきである）の方が正確で客観性がある、などというのはひどい世迷い言であって、標準語も東京の山の手で使われていた一方言にすぎない。東京から離れれば離れるほどそれは「よそ行きの言葉」となり、方言との間にギャップが

*総合教育科

平成十六年八月二十四日受理

生じる。それで別に実害がなければかまわないが、医療現場はそうはゆくまい。少しでも誤診につながる危険は排除すべきであろう。初めての土地で仕事を得た医療者はまず、その土地の方言を学ぶべきだ、と言ったら言い過ぎだろうか。

## 一

常識、というものがある。「普通の人が持っている、または、持つべき、あたりまえの知識や見識」(新字源・角川書店)とある。

しかしこれが曲者(くせもの)なのだ。知っていてそれを正しいと信じる人が多いのが常識というものだが、それを鵜呑みにして思考を硬直させてしまう恐れが大きい。そうなったら、他人に何を説くことができるのだろうか。

孟母三遷の教えといえば賢母の逸話として有名である。この母は孟子を教育するのに三回も引越をした。最初は墓地の近くに住んだ孟子が埋葬の真似をするというので、次に市中に移ったら商売の真似をする。三回めに学校のそばへ引越したら勉強するようになったので安心したという話である。

孟母はかなりの教育ママであったらしい。しかし彼女が賢母だとすると、いまかりに、子供は環境に感化されやすいと考えて初めから学校のそばに住んだ母親がいたとして、その母は何と呼ばれることになるのだろうか。

一四九二年のコロンブスと言えば「新大陸の発見」それは誰でも知っている。だが「新大陸」はヨーロッパ人にとって未知の大陸だっただけのことで、コロンブス以前からずっと住んでいた人々にとっては新大陸でもないし発見でもない。当然のことである。だから正しくは「先住民によるコロンブスの発見」となる。「コロンブスの卵」的発想をすれば。

最近とんと耳にしなくなったのが、「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」。古代ローマの詩人ユヴェナリスはそんな事は言わなかった。「健全なる肉体」の内に「健全なる精神」を求めたのである。それくらい、両者ともにそろって手に入れることは難しい。犯罪者を見ればわかる。ともかく「健全なる肉体」が「健全なる精神」を得るための必要条件とするのはまったく健全ではない。

一時は一大ブームとなったエアロビクス。「長寿＝勝ち組」という安易な価値観に、健康崇拝的似非(えせ)情報が火をつけた。アメリカの流行に敏感な日本人は、単に身体に良いというだけの知識しかなく、エアロビクスが本来、肥満の危険を防ぐために開発されたことは念頭になかった。そのため、エアロビクスで毎日汗を流しているのはおよそ肥満とは縁のない人々ばかりという珍奇な現象が起こった。

シェイクスピアの「ハムレット」は有名だがハムレットの科白「弱き者よ汝の名は女なり!」("Frailty, thy name is woman!")はよく知られている。問題は「弱き者」という訳である。「女」はハムレットの母ガートルードで、彼女は夫の王を毒殺した叔父とすぐに再婚する。ハムレットのことばは母を不貞の女と非難しているわけで〈弱い＝かよわい〉では文脈からみて、おかしい。「誘惑に弱き者」という意味がとれるように訳すべきであって、「弱き者」では適当ではない。ガートルードはけっしてか弱き女ではない。(注1)

これらはみな「中途半端な知識(常識)の陥穽」とも言うべきもの(一知半解とか半可通と呼ばれて馬鹿にされる)の例であり、われわれは往々にしてこうした誤謬や錯覚から自由になれない。先入観や偏見にしても同様である。

黒沢明監督の映画「生きる」の中にこんなシーンがある。区役所に勤める女性が、ある笑い話を紹介する。役人どうしの会話「君はどうして休みを取らないのかい?君が休むと皆が困るからかい?」「いや、僕が休んでも誰も困らないってことが皆にわかっちゃうからだよ。」質問する方はごく常識的に考えている。それを超えた意外な答が面白い。

人が何かを学ぶことによって得られる知識は貴重である。我々人類はそうした知識を活用して、効率的な生産活動を行ってきた。現代社会においても「効率」を向上させることは人間のあらゆる活動において常に最も重要な課題であると考えられている。

したがって、人が人を説得するという行為はきわめて効率的でない。なぜなら、思い込み、迷い、弱気になり、諦めている人を励まし、勇気づけ、奮い立たせ、時には慰めるために必要なすべての労力ははかり知れないものだからだ。人が抱え込む内面の苦悩は、人の諸活動の効率を阻害するものなの

に、取り除くことは容易ではない。苦悩を生む原因を突き止め、望ましい方向を示すために、どれほど多くの人が「苦悩し・語り・著わして」きたか。それらを知識として吸収する機会に恵まれた現代においてさえ、明解な手引（マニュアル）はないのである。

前稿では筆者の経験に基づいて卑近な説得術を紹介したが（注2）、本稿では、脚本家や監督が独自の手法を用いて不特定多数の観客を説得するという、映画の世界を取り上げる。

説得術と映画といっても一見、関連はなさそうに思われるかもしれない。しかし、文学や音楽、美術よりも大衆のなかに根をおろしているし、何よりヒットするかどうか大衆の厳しい批評の目にさらされるのが映画である。

競争は激しく、製作費や宣伝費も年々膨れあがる一方だ。出演する俳優たちにも熾烈な競争があり、脚本家（ライター）たちも作品を映画会社に必死で売り込む。特にシネマの殿堂ハリウッドではこの競争が顕著である。ヒット作品の陰で多くの情熱が葬られてゆく厳しさは、邦画（日本映画）界からは想像しにくい。こうした、大衆との近さが映画を選んだ理由の一つである。

もう一つの理由は、資料となる映画が簡単に入手できるという、筆者側の事情である。

また、映画解説や映画批評はさまざまな角度から総合的に映画を捉（とら）えてゆくが、ヒットした作品には採点が甘くなる嫌いがある。しかし筆者にとっては説得術が生かされているかどうかが問題なのであり、製作費がいくらかかろうと、どういうスターが出演していようと、観客動員数が多かろうが少なかろうが、そういう点に興味はない。ゆえに普通の映画解説とは一線を画しているし、新しい試みになり得たという自負もいささかはある。

この考察のために洋画邦画二百本以上を観たが、筆者にとって楽しい仕事になった。その結果十五本の作品が本稿のテーマを含んでいた。さらに「説得の型（パターン）」によっておおむね三つの型に分けられる。すなわち、

① 説喩型…相手が知らない、あるいは忘れている事柄に気づかせる。（十本）
② 鼓舞型…相手の誇り・自尊心（愛国心）に直接訴える。（二本）
③ 論破型…正義や道徳を守る生き方を強く示して相手を導く。（三本）

―である。ただし、説得の具体的な方法を賞味することに比べれば、このような分類は取るに足らないものだ。それでも、この順に紹介してゆくことにする。

なお、映画全体の説明はいたずらに冗漫になるだけなので避け、必要最小限の場面説明にとどめることにした。

## 二・①

○フォレスト・ガンプ（'95パラマウント）

主人公の名がタイトル。ガンプは知能指数こそ低いけれど素直で無垢な、天使のような青年だ。母が急病という知らせを聞いて駆けつけるが、死の床の母はショックを受けているガンプにわかりやすく語りかける。

「もうじき死ぬのよ。…そういう時が来たのよ。そういう時がね。いい、死を怖がらないで、生の一部なんだから。誰にも逃げられない運命なの。私がお前のママになったように。私なりに努力したわ。…自分の運命は自分で決めるの。神様の贈り物を生かして。自分で見つけるのよ。人生はチョコレートの箱、食べるまで中身はわからない。」（字幕より引用、以下同じ）

○スーパーの女（'96伊丹プロ）

「この店はダメだな。隅っこにゴミが落ちてる。パートのおばさんの白衣が汚れてる。お肉が変色してるし魚のパックに赤いおつゆが出てる。商品の顔がきちんとこっちを向いていない。変な生簀（いけす）なんかしつらえてある。客がホウレンソウを下から引っ張り出してる、店を信用していない証拠だ。」

スーパーマーケットの店長、小林五郎は小学校の同級生井上花子のこんな観察力に驚く。しかし彼のスーパーは花子に「潰れる前のスーパー」の烙印を押されてしまった。彼の店「正直屋」は典型的な同族会社で、近所に開店した安売りスーパー「安売大魔王」に比べてはっきり見劣りがした。しかし花子は安売大魔王のインチキ臭さを見抜いていた。例えば先着千名様に限り、と銘打った値引アイスクリームが開店一時間で売り切れたり、値引の肉は元値が高くしてある。牛肉コーナーの照明は赤色灯を使って色をごまかしている、と。

五郎はすっかり花子の眼力に惚れこみ、自分の店に採用する。彼女の眼に映った正直屋の経営の実態はひどいものだった。その最たるものが、バックヤードの精肉・鮮魚担当の職人たちの気質だった。売れもしない高級品を扱

いたがるうえに、客の好みにはまったく無関心だ。花子の改革はついに店の存亡にかかわる問題に行きついた。

「スーパーにとって最も大切なのは、客の信用よ。何に対する信用？ウソをつかない、鮮度のいいものだけを売る、ホンモノを売ることへの信用。そうすれば従業員も胸を張って、誇りを持って仕事ができる。」

〝安かろう悪かろう〟の安売店への突破口が開け、徹底したお客本位の店に生まれ変わった「正直屋」は、古い体質から抜け出して経営危機を乗り切ってゆくのだった。これは、目先の利益よりも、長いスパンで信用獲得をめざすという本来の確かな経営ビジョンを提示できたからであろう。

○ワーキング・ガール（'88二十世紀フォックス）

テスはNYの証券会社に勤めるOL。証券マン養成コースに進みたいが、秘書養成学校卒という学歴が災いしてなかなか這い上がれない。しかしいつも新聞や雑誌から熱心に情報収集を続けるのだった。

放送業界へ進出を計るトラスク社に対し、南部の放送局メトロ社の買収計画を売り込んだテスは、実はマーシュ社企業合併部の部長秘書にすぎなかった。このアイディアを部長に盗用されたと知ったテスは信頼していた部長の裏切りを許せず、秘書という身分を隠してデューイ社のジャックとパートナーを組みメトロ社買収計画を実現させるに至った。しかしそれは部長の知るところとなり、手柄は部長のものと思われた矢先、メトロ社の人気DJがNYに進出するという記事を雑誌で読む。テスはこの買収計画にはメリットがないとトラスク社社長に進言する。彼はその進言の根拠を知りたくなり、テスの説明に耳を傾ける。上がってゆくエレベーターの中のわずかな時間――それはテスのラストチャンスであった。

テス「契約に落とし穴があるのよ。」

社長「落とし穴とは？」

（人気DJの記事を見せて）

ジャック「スリムはメトロ・ラジオのスターだ。あのネットワークは彼の番組でもっている。」

テス「彼が抜けたら、メトロはただの不動産物件よ。」

ジャック「確認なさっては？別のエレベーターで彼女の話を。」

（ファイルを示しながら）

テス「これは経済誌です。放送業界進出に関する貴方の記事が……。同じ日に出たポスト紙の紙面にラジオのお笑いショーの司会者ボビー・スタインの記事が。彼が『上級階級の奥様方と慈善バザーを催す』と。次に社交面を見たらお宅のお嬢様の写真が。『バザーに一役買う』と。そこでひらめいたんです、〝トラスクとラジオ〟、ジャックに話したら彼がメトロと話をつけ、今こうしてここに。」

社長は大きく頷き、この買収計画のアイディアは実はテスのものだったと理解したのである。こうしてテスはトラスク社の損失を救った。

○スリーパーズ（'96ポリグラム）

NYマンハッタン・ウエストサイドで育った四人の少年、ジョン、トミー、マイケル、シェイクスは、度を越した悪戯のために少年院へ送致される。同じ町のボビー神父は彼らの心の支えとなるべく尽力するが、少年たちは好色な看守たちから何度も性的虐待を受けてしまう。

出所後マイケルは検事となり、ジョンとトミーはマフィアに、シェイクスは新聞記者になる。やがて、偶然かつての悪看守に再会したジョンとトミーは、彼を射殺して起訴される。彼らを訴追する立場になったマイケルはこの裁判を契機に、少年院時代に受けた暴行のすべてを明るみに出して看守たちの罪を暴こうとする。少年たちが育った移民街の顔役もこの企みに力を貸し、弁護士も巻き込んで大芝居を打つことになる。

マイケルの狙いは看守たちの断罪だけではなく、ジョンとトミーの無罪獲得だった。彼は記者のシェイクスに計画のすべてを打ち明け、忌まわしい過去への復讐と決着のために戦おうと説く。この固い決意がシェイクスの心を動かし、恐怖と屈辱の記憶が二人を再び強く結びつけた。

シェイクスはジョンとトミーの無罪判決のため、ボビー神父を訪ねて二人のアリバイ証言を頼み込むが、聖職にある神父は当然首を縦に振らない。偽証することになるからだ。しかし諦めないシェイクスは、闇に葬ったはずのつらい過去をすべて神父に打ち明ける。四人を少年のころから慈しんできた神父にとって、この告白の衝撃は大きかった。ついに神父は自らを偽証の罪人とする道を選ぶのだった。

○ショーシャンクの空に（'96アスミック）

妻殺しの冤罪で終身刑となったアンドリュー・デュフレーン（アンディ）は若くして銀行の副頭取だった。刑務所では友人も少なく周囲にうちとけようとしない彼は、孤独のうちに何年かを過ごしたが、税金や所得申告の専門知識によって看守たちに重宝がられるようになってゆく。

一九〇五年に入所し、四十年以上を刑務所で過ごした老人ブルックスはある日突然、囚人にナイフを突きつけて錯乱した。温厚な人柄の彼にはまったくふさわしからぬ振舞いである。「仮釈放になりたくない」それが原因だった。しかし囚人たちが待ち望む〝自由〟を手に入れたブルックスがなぜそれを拒むのか誰にも見当がつかない。〝調達屋〟レッドがその理由を仲間に説明する。

レッド「彼は正気だ。彼は恐れているんだ。」

仲間「シャバを恐れる？」

レッド「五十年もムショ暮しだ、ここしか知らない。ここでなら彼は有名人だが外は違う。ただの老いた元服役囚だ、白い目で見られる。分かるか？」

仲間「出まかせを言うな。」

レッド「何とでも言え。だがあの塀を見ろよ。最初は憎み、しだいに慣れ、長い年月の間に頼るようになる。〝施設慣れ〟さ。」

仲間「俺はそうはならねえ。」

仲間「そうか？五十年もいればどうなるか……。」

レッド「そのとおり。…終身刑は人を廃人にする刑罰だ。…陰湿な方法で。」

ブルックス老人は出所した。仕事も住むところもあてがわれたが、友人もなく孤独で夜もよく眠れず、安らぎが欲しい彼は「疲れ果てた」と言い残して自殺してしまう。レッドの言った通りだった。「塀の内」では何かの希望を持つことさえも危険である。希望が裏切られたとき、人は落胆し、後悔し、無気力に陥ってしまうからだ。しかしそこには、〝守られている安らぎ〟があるのだ。

○赤ひげ（'65東宝）

時代背景を述べておく。

十七・十八・十九世紀のヨーロッパ文化は長崎を通じオランダ人・オランダ語・オランダ書によってわが国に伝わったということができる。（中略）安永三（一七七四）に出板された杉田玄白・前野良沢らによる「解体新書」は日本最初の西洋医学書翻訳書として貴重なものであることはいうをまたないが、とりわけオランダ医学にとってはこの上ない大きな刺激となったことは確かである。この書が出板されたことにより西洋医学書の翻訳書が急に増加し、オランダ医学を志す者が多くなったのも事実であったが、当時の日本の医学の大勢はなお昔ながらの漢方医学によって支配されていたのが真相であった。（中略）周囲の情勢が次第に開国に傾くにつれ、江戸幕府当局は医学の面でも従来の漢方医学一辺倒から西洋医学へ目を移さざるを得なくなった。

（国史大辞典・吉川弘文館）

保本登は三年余り長崎に留学して江戸に戻ったが、父の勧めで小石川養生所の新出去定（赤ひげ）の下で修行することになる。

初対面の挨拶もそこそこに赤ひげは、保本に長崎留学時代の筆記と図録をすぐに提出せよ、と言う。自分の意志で養生所の門をくぐったわけではない保本は、この命令に従わず以後ことごとに反発するようになる。

赤ひげ「まずい食べ物でもよく噛んでおれば味が出てくる。ここの仕事も、打ち込んでいれば捨てたものではない。…ところでなぜ図録と筆記をさし出さんのだ？」

保本「嫌だからです。私はオランダ医学の各科を学びましたがずいぶん苦心して自分なりの診断や治療の工夫をしました。あれは私のものです。ひとに取り上げられる謂われはありません。」

赤ひげ「医学は誰のものでもない、天下のものだ。」

---

赤ひげが一人の老人を保本に診察させている。赤ひげの見立ては「膵臓癌の末期」であった。

赤ひげ「もう打つ手はない。この病例は稀だからよく見ておけ。」

保本「するとこの病気には治療法がないというのですか。」

赤ひげ「ない。この病気に限らず、あらゆる病気に対して治療法などない。医術などといっても情けないものだ。医者にはその症状と経過はわかるし、生命力の強い個体には多少の助力をすることができる。だがそれだ

けのことだ。現在我々にできることは、貧困と無知に対する戦いだ。それによって医術の不足を補うほかはない。…それは政治の問題だというのだな?誰もがそう言って済ましている。だが、これまで政治が貧困と無知に大して何かしたことがあるか?人間を貧困と無知のままにしておいてはならぬという法令が一度でも出たことがあるか?」

保本「しかし、この養生所という設備はそのために幕府の費用で……。」

赤ひげ「ないよりはあったほうがよい。しかし、問題はもっと前にある。貧困と無知さえ何とかできれば、病気の大半は起こらずに済むんだ。…いや、病気の陰にはいつも人間の恐ろしい不幸が隠れている。…この六助は蒔絵師だった。その道ではかなり知られた職人だったらしいが、しかし木賃宿から運び込まれたのだが誰も見舞に来た者はないし当人も黙って何も語らない。何を聞いても答えないし、今日まで一度も口を利いたことがない、苦しいということさえ口にしなかった。たぶん、もっと根強い苦しみを抱いているのだろう。……人間の一生で臨終ほど荘厳なものはない。それをよく見ておけ。」

この映画では、最新の医学を学んだ若い保本を、赤ひげが医学の原点を説き、見せ、学ばせることによって教え導こうとしている。その努力が功を奏し、保本は栄達の道を捨て、養生所に残って貧しい者の治療に身を捧げる決意をするのである。

○七人の侍(54東宝)

戦国時代、相次ぐ戦乱が生み出した野武士の横行――で始まる時代劇。

人口四十人ほどの山あいの村が野武士に狙われる。百姓たちは怯え、怒り、代官はあてにならないから一か八か戦うことを唱える者と、降伏して生き延びることを唱える者との間で意見が割れる。そこで爺様(長老)の判断を仰ぐことになった。彼は言う、

爺様「やるべし。」

(百姓たちは戦はわからぬと異を唱える)

爺様「侍雇うだ。…おら、この目で見ただよ。おめえらの生まれた村が焼かれた時も、この土地さ逃げて来る時も、燃えていねえのは侍雇ったその村だけだった。」

百姓「水粥すすってるおらたちがどうして侍食わせるだ。…食わせるだけで百姓のために戦う侍がいるだか?侍は気位が高えだで。」

爺様「腹の減った侍捜すだよ。腹が減りゃ、熊だって山を下りるだ。」

こうして百姓たちの「用心棒」捜しは始まったが、"腹をすかせた侍"はなかなか見つからない。町を行き来する侍は浪人が多いのに、任官先を求めている者ばかりだった。そんな時、町で人質事件があってそれを解決した初老の侍、島田勘兵衛と彼に師事する若侍とが百姓たちの頼みに関心を持つ。しかし侍集めは難しいに違いなく、老いた勘兵衛は迷っている。百姓たちは落胆して泣き出す始末。その場に居あわせた博奕打ちが百姓たちを「首くくって死んじまえ」と罵ると、

若侍「下郎、口を慎め。貴様にはこの百姓たちの苦衷がわからんのか。」

博奕打ち「笑わしちゃいけねえよ。わかってねえのはお前さんたちよ。そうじゃねえか。わかってたら助けてやったらいいじゃねえか。」

(若侍は口をつぐみ刀に手をかける。剣呑な雰囲気の中で)

博奕打ち「お侍、これを見てくれ。(一椀の飯を見せて)こいつはお前さんたちの食い分だ。ところがこの抜け作どもは何食ってると思う?稗食ってるんだ。自分たちは稗食ってお前さんたちには白い飯食わしてんだ。百姓にしちゃ精いっぱいなんだ、何言ってやんでえ。」

下賤の者の言葉とはいえ、これが勘兵衛の迷いを払ったのである。彼を主とする七人の侍がそろってゆく原点だ。

村へ入った七人の侍たちは百姓たちを訓練するのに余念がない。しかし大量の弓・槍・鎧が供出された時侍たちは撫然とする。これは百姓たちの"落武者狩り"の戦利品だからだ。侍にしてみればこちらの弱みにつけ込んで武具をかき集めるような百姓に反感を持つのも当然だろう。しかし百姓生まれの通称菊千代はそうではなかった。彼は激しく反論した。

菊千代「おめえたち、百姓を何だと思ってたんだ。仏様とでも思ってたか。笑わしちゃいけねえや、百姓ぐれえ悪擦れした生き物はないんだぜ。米出せっちゃ、ねえ。麦出せっちゃ、ねえ。何もかもねえんだ。ところがあるんだ、何だってあるんだ。床下引っぺがして掘ってみな。そこになかったら納屋の隅だ。出てくる出てくる。瓶に入った米・豆・酒……ペコペコ頭を下げて嘘をつく。何でもごまかす。戦がありゃ、すぐに竹槍作って落

武者狩りだ。よく聞きな、百姓ってのはな、けちんぼうで泣き虫で狡くて意地悪で間抜けで、人殺しだ。だがな、そんなけだものを作りやがったのは一体誰だ、おめえたちだよ。侍がやったんだ。村を焼く、田畑踏んつぶす、食い物は取り上げる、人夫にはこき使う、女は犯す、手向かえば殺す。一体百姓はどうすりゃいいんだ、百姓はどうすりゃいいんだ！」

侍たちは黙り込む。こうして険悪な空気は一掃された。

---

勘兵衛が川向うの三軒の離れ家を引払うように命じると、初めて造反が起こった。三軒家の持ち主たちは自分たちだけで家を守るというのだ。勘兵衛は一喝する。

「離れ家は三つ、部落の家は二十だ。三軒のために二十軒を危うくはできん。また、この部落を踏みにじられて離れ家の生きる道はない。戦とはそういうものだ。人を守ってこそ、自分も守れる。己のことばかり考える奴は、己をも滅ぼす奴だ！」

四十騎の野武士を相手に村はよく持ちこたえて明朝は最後の決戦と思われた。その夜、村は異様な緊張と一種の刹那主義とに包まれ、若侍（勝四郎）と恋仲だった村の娘は彼に体を許してしまう。その父は怒り悲しみ村中がその事件を知る。夜が明け、守りを固める百姓たちに不安と恐怖が色濃いのを見て勘兵衛はその緊張をほぐそうとし、

「みんな、いよいよ決戦だぞ。…ところで勝四郎、今日は存分に働けよ。お前もゆうべからもう大人だ！」

百姓たちはドッと湧き、これは図に当たった。

---

戦が終ってみると、侍は四人が斃れ、百姓たちはといえば村中総出で田植を始める。そのしぶとくもたくましい姿を眺めながら独言のように勘兵衛が呟く。

「今度もまた負け戦だったな。勝ったのはあの百姓たちだ。わしたちではない。」

○十二人の怒れる男（'57ワーナー）

被告は十八才の少年で、父親殺しで起訴されていた。市民の中から選ばれた十二人の陪審員たちは予め裁判長から、有罪に決まった場合被告は死刑になるものと聞かされていた。さて初めに採決してみると一人を除いて十一人が有罪。全員一致が原則だから、十一人がたった一人を説得する形になる。

有罪派の決め手は、犯行自体を目撃したという女性の証言と逃亡する犯人を目撃したという老人の証言および凶器のナイフであった。法的には「人証」「物証」はそろっている。親子の仲も悪く被告の少年には非行歴があるし事件当時のアリバイも立証はされていない。

人ひとりの運命を簡単に決めることはできないと考えた陪審員八番の男は、有罪派の根拠を一つ一つ筋道立てて崩してゆく。（その根拠の反証は必ずしも必要ではなく、たとえ無罪が立証されなくても、有罪とすることに「合理的な疑い」があれば、疑わしきは罰せずの原則に従って無罪となるのだ。）

(1)「殺してやる」と叫ぶ少年の声、その直後に人が倒れる音を聞き十五秒後に、逃げてゆく少年を見たという老人の証言。

線路ぎわの家で電車が通過する時の騒音はすごいのでその最中に他の声や音が聞こえるはずがない。仮に聞こえたとしても足の悪い証人には十五秒後に、逃げる少年を目撃できるほど素早く入口のドアに行くことはできない。

(2)殺人の瞬間を、線路の向い側から通過する電車の窓越しに見たという女性の証言

少年の部屋の出来事を十八m離れて電車の窓越しに見たという女性の鼻の脇には眼鏡の跡があった。もし事件の起こった深夜、ベッドから目撃したのなら眼鏡はかけていないはずで、これは合理的な疑いとなり証言の信憑性は低くなる。

さらに、殺人現場に残されていた凶器のナイフも、指紋は拭い取ってありその冷静さがあるなら現場に残しておいたことと矛盾する。つまり凶器と少年とが結びつかない、と主張した。こうして無罪派が徐々に増えて、最後の評決はついに全員一致の無罪となった。

○グッドウィルハンティング（'97ミラマックス）

若手の個性派俳優マット・デーモンがベン・アフレックと脚本を書き主演した作品。主人公のウィル・ハンティングを、難解な若者と設定している。ウィルは複数の里親を転々とし虐待も受けた。傷害や窃盗を重ねるが裁判で

は自分で自分の弁護を行い、すべて不起訴に持ち込んできた。法律や歴史の知識は驚異的である。

MITのエリート教授の出した数学の難問を清掃作業中に偶然見つけ、スラスラ解いて教授を唸らせる。かと思うと幼い頃自分をいじめた男を撲って収監されるが教授の監督下で保護観察となる。彼はウィルの数学的才能だけを伸ばそうとするがそれでは人間ウィルを把握することはできない。ウィルは相変わらず友達とビル解体の仕事をし、ハーバード大学に通うガールフレンドもいる。

教授はウィルの信頼を得ようとセラピーを受けさせるが、そのシニカルで反抗的な態度のためセラピストたちは降りてしまう。持て余した教授はバンカーヒル市民大学のショーン・マグワイアにセラピーを依頼し初めてウィルは少しずつ心を開き始める。

ウィルは何を恐れているのか?自分をさらけ出すことか、自分の町を離れることか、今の生活を変えることか。ショーンは問いかける、「あり余る才能があるのになぜそれを生かさないのか。」ウィルの答はない。恋人がカリフォルニアへ行ってしまっても、相変わらずビル解体の仕事だ。そんな、自身に対して頑なウィルに向かって親友のチャッキーは言う。

「いいか、お前は親友だからハッキリ言うけど、二十年たって俺の家の隣にお前がいて、うちに来て一緒にパトリオット・ゲームなんか見て、まだ建築現場で働いているようだったら俺はお前をブッ殺す。脅しじゃなくて、本気で言ってるんだ、お前をブッ殺すぜ。」

ウィル「チャッキー、何を言ってる……。」

チャッキー「聞けよ、お前は俺たちにない物を持ってるんだ。」

ウィル「またそれかよ。自分への義務か?いやだとしたら?」

チャッキー「馬鹿野郎、俺への義務だよ。明日目がさめたら俺は五十歳でまだここで働いてる、それはいいんだ、俺はそうやって生きてゆくんだから。…だけどお前は宝くじの当選券をケツの下に敷いてそれを現金にするだけの勇気がない腰抜けなんだ。アホらしいのは、お前が持っているもののためなら俺は何だってやってやるってことだよ!他の奴らもみんなそうさ。二十年たってまだここにいたら、お前は俺たちを完璧に侮辱してるってことだからな。……わかってることを言ってやるよ。毎日お前を迎えに行って飲みに行ったりして楽しいこともある。でもな、一日のうちでいつが最高の時か知ってるか?お前の家をノックする十秒前だよ。お前が行ってしまったかも、って考えるからさ。」

ショーンは裁判所に提出するためのウィルの鑑定書を書き上げた。彼はウィルに向かって「すべては君のせいじゃない。」と何度も言い聞かせる。彼自身の被虐待経験も明かし、ウィルを呪縛している過去と別れさせるために。ウィルは初めて心を開き涙が頬を伝う。こうしてウィルはチャッキーたちと別れボストンを捨てて一路、カリフォルニアの恋人のもとへ旅立つ。

○戦場にかける橋(’57コロンビア)

第二次大戦下のビルマ。斎藤大佐率いる日本軍が英米軍捕虜を使って鉄橋を建設していた。完成までの日数は限られているのに、日本軍には専門的技術者がいないため作業は進まない。斎藤は捕虜のリーダーのニコルスン大佐に建設への協力を(異例のことだが)要請せざるを得なかった.ニコルスンは承諾し、いざ現場を視察してみると、兵同士の連絡が悪く、チームワークもない。互いに邪魔し合っている班さえある。

ニコルスン「日本軍のおかげで本隊は無秩序な群衆と化した。建て直しが必要だ。難しい仕事だが、幸い橋というよい手段がある。こっちの技術と能率を日本軍に見せよう、イギリス軍の実力も。僻地での器具の調達は難しいだろうが挑戦するのだ。兵隊には目標が必要だ。ない場合は我々が考え出す。目標ができたからには真剣にやれ。兵隊には自分の仕事に誇りを持たせることが肝心だ。」

軍医「この橋を作るのがいい考えだと思いますか。」

ニコルスン「いい考えかだって?.兵隊を見たまえ、彼らは士気が上がり規律と健康を取り戻した。食事もよくなり、大切にされて喜んでいる。」

軍医「しかし我々がしている事は敵を利するどころか反逆行為です。」

ニコルスン「バカを言うな、捕虜に兵役拒否の権利はない。」

軍医「しかしまじめに働く必要は?なぜ敵が作るのよりもっとよい橋を?」

ニコルスン「斎藤の手術をするとしたら努力せずに殺すか?隊の規律や評判はどうでもよいのか?何者も我々を破壊できない事を示すのだ。後世にこの橋を渡る人は思うだろう、これを作ったイギリス軍は、捕われの身で

てことだからな。……わかってることを言ってやるよ。毎日お前を迎えに

この橋を渡る人は思うだろう、これを作ったイギリス軍は、捕われの身で

も奴隷に身を落とさなかった事を。」

②

○デーブ（'93ワーナー）

この映画は、平凡なアメリカ市民が大統領にそっくりだという理由で代役を務めさせられる、という奇想天外なものである。人助けを生きがいにするデーブは、ホワイトハウスのシークレットサービスにスカウトされ、大統領の代役（影武者）を一日だけ演じる。ところが本物のほうは浮気の最中に脳梗塞で倒れて意識が戻らなくなってしまう。この事件はもちろん極秘とされ、主席補佐官ボブと広報官アランはデーブに新たな、そして重大な提案を持ちかける。

アラン「君の実力を買って契約を延長したい。…君を呼んだのには理由がある。大統領に異変が起きた。だが動揺している余裕はない。我々が第一に考えるべきなのは、国のことだ。事態はかなり深刻だ、重態なんだ。…デーブ、我々は国民をもそして敵をも安心させねばならない。彼らが安心して眠れるのは大統領が元気に働いているからだ。人々の意識の中で大統領は常にここだ、この椅子だ。」

デーブ「ちょっと待ってくれ。…副大統領は？」

ボブ「言いたくなかったが、彼は精神的に不安定だ。…致命的に。」

デーブ「違法では？」

アラン「デーブ、信号無視したことは？人も車もいない道で、絶対に安全な状況だったら？」

デーブ「するかも。」

アラン「たとえば、重病の母親を車に乗せていて病院へ急いでる、それなら？」

デーブ「すると思う。」

アラン「そして今、この国全体が車の中にある。アメリカ合衆国全体がだ。」

デーブ「わかりやすい。」

アラン「国は重病だ。病院へ急ぐんだ。」

こうしてデーブはまんまと丸め込まれてしまうのだが、アランはうまく比喩（ひゆ）を使ってデーブの愛国心に訴えかける説得を行ったのである。

○東京裁判（'83講談社）

極東国際軍事裁判いわゆる東京裁判は、連合国最高司令官D・マッカーサー元帥の指揮の下に、昭和二十一年五月三日から二十三年十一月十二日までの二年半にわたり、米・英・ソ・中など十一か国の判事国によってA級戦犯二十八名を裁いた。彼らへの訴因は平和への罪、殺人、人道への罪など五十五項目に及び、昭和三年から終戦にいたる日本の対内的・対外的国家活動のすべてが追究された。マッカーサー元帥が、占領目的の達成を重視する見地から、裕仁天皇を訴追から除外すべきであるとの意見を米国政府に伝えた、という。（国史大辞典）

この映画はその東京裁判での審理の過程を刻明に追ったドキュメンタリーである。この裁判の歴史的背景は別に記すが（注3）、筆者が注目するのは五人のアメリカ人から成る日本弁護団の陳述である。だがそれを記す前に、本裁判の正当性を問題にした弁論から見ておこう。

---

日本側の弁護に立った清瀬一郎は、「ポツダム宣言の時点で国際法学者は、宣戦布告・戦争行為自体を戦争犯罪と見做（な）していなかった。平和に対する罪、また人道に対する罪というのはポツダム宣言時には戦争犯罪の範囲外であった。したがってこのような罪で起訴することは違法である。ある行為を、後になってから法律を作って処罰することは近代法の大原則に背くものであり、公正を謳った裁判は根底から崩壊する。」

法律上きわめて重要なこの抗弁は、裁判長によって一方的に打ち切られてしまった。彼が公判を開始する時点で保証した公正さが大きく揺らぎ始めたのである。しかし、被告や日本人傍聴者を最も驚かせたのは、五人のアメリカ人から成る日本弁護団の申立であった。

まずジョージ・A・ファーネスは「真に公正な裁判を行うのならば、戦争に関係のない中立国によって行われるべきで、勝者による敗者の裁判はけっして公正ではあり得ない。」と訴えた。すなわち勝者が敗者を裁くとすればそれは報復裁判になってしまう危険が大きいからである。だが、アメリカ側から敵国日本に対し、裁判自体の不合理を突く形で異議が申立てられたこと、そしてそれが昭和二十一年という時期であったことを考えると瞠目に値する。

続いて行われたベンブルース・ブレークニーの申立はさらに刺激的であった。彼はファーネスよりも直接的に戦争犯罪人裁判の矛盾を追及したのである。曰く、「戦争に関し、国際法が存在していることは戦争の合法性を示す証拠である。戦争の開始・通告・戦闘方法・終結を決める法規も戦争自体が非合法なら全く無意味である。」つまり国際法は、国家利益のために行う戦争をこれまで非合法と見做したことはない、法廷において戦争の計画・遂行が裁かれたことは一度もない、というのである。

戦争が合法的なら、戦争中のあらゆる行為において犯罪はあり得ないから、本裁判も成立しないことになる。ブレークニーの申立はこの裁判においてマッカーサーが意図した政治的目的を鋭く批判することになった。しかし次のくだりはさらに驚くべきものである。

「国際法は戦争における個人の罪を裁くものではない。戦争が合法的である以上、戦争中の殺人も合法的である。もしキット提督の死が真珠湾爆撃による殺人罪になるならば、我々は広島に原爆を投下した者の名を挙げることができる。(中略)原爆投下を黙認した者がある。その者たちが裁いている。」

これは戦争における勝者敗者を超えて法の公正を厳しく保とうとする考え方であり、本裁判の持つ本質的な欠陥を突くものであった。裁判長はこれらの異議申立に対し、却下を申し渡したのみである。裁判は重大な問題点を明らかにしただけで成立してしまったのである。

インド代表判事ラダビノード・パルは判事団の中でただ一人、国際法関係の著書を持つ裁判官であった。東京裁判の判決直前にウェッブ裁判長が明らかにしたところによると、パル判事の提出した意見書は英文で二十五万語、日本語の訳文で一二一九ページに及んだという。

彼は、当裁判が問題とすべきことは何か、ということから出発し、その結論として裁判所条例といえども国際法を超えることは許されない、これを冒すことはまさに越権であるとし、国際裁判所の裁判官は最高司令官より上位に立って裁定する権限を持つべきであるという基本的な姿勢を表明した。そして、この裁判においては日本の行為が侵略だったかどうかをただすことが本義であったにもかかわらず、裁判所側が初めから侵略戦争であったとの前提で裁判を進めた事実を非難し、彼自身の歴史への深い造詣から、裁判で問われた諸々の事件を解明し検事側の描いた日本の侵略戦争の歩みを歴史の偽造とまで断じた。彼はアジアの歴史において、さらにさかのぼった時代の欧米の行為こそまさに侵略の名に値すると言及し、全被告を無罪と判定しすべての起訴事実から免除すべきであると主張した。

もちろんパル判事は、日本の戦争行為を正当化しているわけではない。ただ、東京裁判のなかで清瀬、ファーネス、ブレークニー弁護人たちの申立と同じく、法の求める公正さが何であるかを明らかにした点で卓見であり、説得力に富む弁論であったことは確かであろう。

③

○虚栄のかがり火('90ワーナー)

黒人の若者を轢き逃げした白人男性が起訴された。しかし運転していたのが自分ではないことを証明するテープが提出され、裁判長はこれを証拠と認め公訴を棄却、彼は自由の身となる。しかし、傍聴席の黒人たちから裁判長へ〝差別主義者〟のヤジが飛ぶ。裁判長は退廷しかけた足を止めて訴えかける。

「差別主義者だと?よく聞け。肌の色に何の関係がある?法廷で偽証する証人、証人に偽証を唆す検察、政治的野心のために怒れる民衆にいけにえを与える地方検事、神に仕える身ながら自己の利益を追求する破廉恥な聖職者……どこに正義が?答はどうした?……正義が何かを教えよう、正義とは法である。そして法とは、人間の節度の原則を定めるためのささやかな試みだ。節度――それは取引ではない。金もうけでも策略でもペテンでもない。節度とは…おばあちゃんから教わったこと。骨に染みついている。帰り給え、帰って節度ある人間になってほしい、節度ある人に。」

○きっと忘れない('94ワーナー)

モンティはコチコチのハーバード大学生で指導教授の意に沿う卒業論文を書き上げることに汲々としていた。彼は転んだ拍子に落とした大切な論文の原稿をホームレスのサイモンに拾われる。しかしサイモンはすぐには返してくれず、食事や毛布と引換えに少しずつ原稿を返すことになる。ハーバード大生とホームレスの奇妙な契約がこうして生まれた。

サイモンは外見とは違って教養豊かな男でモンティにくっついて潜り込んだ講義では、憲法の本質論で教授をへこませるほどだった。

死期の近づいたサイモンはモンティをこう諭す。

「人の意見をそのまま受け入れるな。死者や本からの受け売りもよせ。人の目を通して物を見るな。自分の耳で聞き自分のふるいにかけろ。」

モンティは三人のハーバード大生と同居していたが、互いの関係は友情と呼べるほどのものではなかった。しかしサイモンの、形にとらわれない生き方が彼らの関係を大きく変え、とりわけモンティは卒業論文を書き直し、独自の政治論を書いて教授に認められる。

○パッチ・アダムス（'98ユニバーサル）

パッチは医学界の伝統的ルールに背き、しかし持ち前の温かい心とユーモアで患者本位の医師になろうとする。彼は言う。

「助けを求めている人間に応えて助けたい。治療だけでなく、患者に助言と希望を与える医者に。患者に笑いを。笑いは鎮痛作用タンパクの分泌を促進、血液中の酸素を増し心臓を活性化、血圧を下げ循環器疾患によい効果を与え免疫性を向上させる。」「人は皆死ぬ。医者の務めは健康を高めることだ。死を遅らすのではなく、質の高い生を与えること。」

パッチはバージニア医科大学で優秀な成績を修めながらも、権威主義的な学部長と対立して放校処分を受けてしまう。しかし彼はこの処分を不服として州の医師会に訴える。多くの医師、看護婦、医学生に向かってパッチは論陣を張った。

「病気と闘う場でのいちばんの敵は〝無関心〟です。教室では〝医者は患者と距離を置くように〟と。でも人間同士が接触すれば必ず影響を与え合う。医者と患者には許されない？そういう教えは間違いです。死を遠ざけるのではなく、生を高めるのが医者の務め。病気が相手なら負けることもある。人間が相手なら結果はどうあれ医者が勝つのです。今日の聴衆は医学生、生命の奇跡に無感覚にならぬように！人体の驚くべき働きに畏敬の念を！重要なのはそれだ、成績など…成績偏重が目標を歪め…医者になる前に人間に！他人や友達、電話の相手、人と対話する能力を！毎日患者の血と尿にまみれている看護婦は得がたい教師だ。ハートが死んでない教師を手本に、思いやりを持って。私は医者として人の役に立ちたいのです！」

医師会は、パッチの服装、言動、医師への批判には問題ありとしながらも「患者の生を高める」考え方を全面的に支持し、放校処分は取り消されるに至った。

## 終わりに

本稿では大部分が映画名場面集のような形になったが、もとより映画の良し悪しに必ずしも結びつくものではない。このような取り上げ方が適切かどうか、視覚的効果や音楽的要素も映画の重要な手法であることも含めて御叱正にゆだねるほかはない。ただ一つ、映画でも文学でも、「観衆」を十分に「説得」できていない作品は多くの支持を得られないということは確かであろう。独創性、合理性、リアリティ、叙情性、どこで「観衆」の心をとらえることができるか。作り手の苦闘はこれからも続いてゆくにちがいない。

## 注　記

注1　他の訳例を挙げる。

「ああ脆き者よ女とは汝が字ぢゃ。」（不詳。坪内逍遥か）

「たわいのない、それが女というものか！」（福田恆存　世界文学全集4　河出書房新社　昭42）

「脆いもの、それが女の本質なのだ！」（氷川怜二　世界文学全集4　集英社　昭48）

「弱き者よ、汝の名は女なり！（大山俊一　シェイクスピア名句辞典日本文芸社　昭58／日本国語大辞典　小学館　昭51）

「心弱きもの、おまえの名は女！」（小田島雄志　シェークスピア劇のヒーローたち　日本放送出版協会　平元）

注2　拙稿「説得術の実際(1)」弓削商船高等専門学校紀要　平15

注3　東京裁判の審理の内容までは日本国民に知らされていない。結審までの二年半、国民は困難な時代を生きていた。「それどころではなかった」のである。しかしこの裁判はその後の日本人の戦争観に大きく影響した。そこで、この裁判をめぐる歴史的背景について本映画の解説を引用しておこう。

「日本統治の占領政策はポツダム宣言によって既に決定されていた。第一に軍事力の粉砕、第二に戦争犯罪人を処罰し代表制に基づく政治形態を築き上げることであり、これらの政策のうち最も急を要するもの、それは戦争犯罪人の処罰である。戦争中指導者であった者たちを逮捕し裁判に付すということは日本人にただちに敗戦を、そして世の中が変わったのだということを思い知らせることになる。このことが他の二つの政策の推進に大きく役立つにちがいない。マッカーサーにとって戦犯の処罰は単なる報復の手段ではなく、考え抜かれた政治的手段であった。

ヨーロッパではかつてのナチス・ドイツの指導者たちが米英仏ソの連合国によって裁かれていた。ニュルンベルク裁判である。四か国は一九二八年に成立したパリ不戦条約に基づきドイツを侵略国と見做していた。「国際紛争の解決は武力に訴えない」趣旨のこの条約は前年、フランス外相ブリアンの提案によってアメリカ国務長官ケロッグとの間に結ばれた「ケロッグ・ブリアン協定」と呼ばれるものである。翌年、ドイツ、日本を含む十五か国がパリでこれに調印し、さらにその後の調印国も含め六十三か国が参加していた。以来これを無視した戦争は侵略戦争と見做され、国際法上違法行為として問われることになった。ニュルンベルク裁判はさらに国際法上はまだ確立されていない、戦争指導者個人の責任を規定した裁判所条例を作成した。ヘルマン・ゲーリング国家元帥を筆頭とする二十五人の被告は通常の戦争犯罪だけでなくこの時新たに作られた、人道に対する罪・平和に対する罪に問われていた。このパリ不戦条約の精神はのちの国際連合憲章の第一章にも謳われている。

東京裁判の最大の争点は天皇の戦争責任であった。主席検察官に任命されたキーチン検事は三十八名の検察団を率いて着任した。昭和二十一年元旦、天皇は人間宣言を行ったが連合国最高司令官マッカーサーは、天皇が日本の民主化に指導的役割を果たしているとして支持した。昭和二十一年一月二十二日、マッカーサー元帥は「極東国際軍事裁判所条例」を布告した。それはニュルンベルク裁判のそれをほとんど引き写したものであり二つの裁判の性格が同じであることを示していた。四月二十九日、起訴状全文の公表と共に、告発される戦争犯罪人二十八名の氏名が発表された。

裁判長はオーストラリアのウェッブ。判事団は十一名でまず二日にわたって朗読された起訴状によれば、東條英機以下二十八名の被告たちは一つの共同謀議に加わっており、その目的は侵略による世界支配でありその目的のための通常の戦争犯罪のほか平和に対する犯罪、人道に対する犯罪を犯し或は犯すことを奨励した、と断じた。五十五の具体的な訴因を列挙し各被告がどの訴因によって起訴されたかを述べていた。

しかし日本側弁護団が結成されたのは裁判開始二日目のことであり、その弁護の方針も国家弁護か個人弁護かで意見が分かれていた。従って弁護団が公判の期日猶予を申し出たのは当然であったが裁判長はわずか一週間を許可したのみであった。

再開された裁判は「裁判管轄権問題」の審議に入った。勝利者である連合国が裁判を行う権利を持つか否か、もし持たぬとすれば裁判は成立せず被告は釈放されるのである。

**参考文献**


・高等学校国語科・新しい授業の工夫20選　大平浩哉編　'89　大修館書店
・「健康」という病　米山公啓　'00　集英社新書
・知の技法　小林康夫・船曳建夫編　'94　東京大学出版会
・科学の現在を問う　村上陽一郎　'00　講談社現代新書
・日本語は国際語になりうるか　鈴木孝夫　'94　講談社学術文庫
・フォレスト・ガンプ　ウィンストン・グルーム　小川敏子訳　'94　講談社
・スリーパーズ　ロレンゾ・カルカテラ　'96　徳間書店
・グッド・ウィル・ハンティング　マット・デイモン＋ベン・アフレック　比嘉世津子訳　愛育社
・かかる軍人ありき　伊藤桂一　'93　光人社
・東京裁判　児島襄　'82　中公新書
・人生応援団　頼藤和寛　'02　産経新聞社


なお、徳山工業高等専門学校の国重徹先生ならびに新居浜工業高等専門学校の塚野修先生にはご多忙の中、ご教示を頂きました。ここに記して深謝いたします。